

朱德熙 (1982) の存現目的語について

The Study of Existential Sentence in Zhu (1982)

青木 萌

要旨 本稿では朱德熙が1982年に著した《语法讲义》の第8章 (pp.114-115) の“存現宾语” (存現目的語) について論じた。主に、朱德熙 (1982:114-115) の存現目的語に対する記述を解説しながら、朱德熙 (1982:114-115) が挙げた例の文に対して、形式意味論の概念を用いた論理式で表記し、文中に含まれている意味を厳密に解釈した。第一章では、存現目的語を含む文を二つのタイプ (AタイプとBタイプ) に分けられることを確認し、論理式を用いて両者の差異を明らかにした。また、[消失]の意味は厳密に[-存在]と解釈できることを指摘した。第二章においては、論理式を用いて、Aタイプの特徴について述べ、第三章では、論理式でBタイプの特徴について述べた。最後の第四章においては、Aグループについて更に詳述した。

キーワード 存現目的語 存現文 朱德熙 述語論理 命題論理

0. はじめに

本稿では朱德熙が1982年に著した《语法讲义》の第8章 (pp.114-115) の“存現宾语” (以下、存現目的語と称する) について論じる。主として、朱德熙 (1982:114-115) の存現目的語に対する記述を見ながら、朱德熙 (1982:114-115) が挙げた用例に対して、形式意味論の概念を用いて厳密に解釈する。周知の如く、存現目的語を含み、[存在]、[出現]、[消失]といった意味を表す存現文は、これまで多くの研究がなされてきたが、朱德熙 (1982:114-115) の見解をもとに存現文に含まれる意味を厳密に論理表記した論考は管見の及ぶ限り見当たらないため、今回敢えてこのような研究を試みたい。まず、第一章では、存現目的語を含む文が二つのタイプ (AタイプとBタイプ) に分けられることを確認し、その後、論理式を用いて両者の差異を明らかにする。第二章では、Aタイプの特徴について、そして第三章では、Bタイプの特徴について論理式を用いながら詳述する。最後の第四章においては、Aグループについて更に論じる。

1. AグループとBグループの特徴について

朱德熙 (1982:114) は“存現宾语表示存在、出現或消失的事物” (存現目的語は[存在]したり、[出現]したり、あるいは[消失]したりする事物を表す) と述べ、以下の例を挙げた¹⁾。

- (1) 黑板上写着字 (黑板に字が書いてある)
- (2) 墙上贴着标语 (壁に標語が貼ってある)
- (3) 门上挂着帘子 (ドアにすだれが掛かってある)
- (4) 台上坐着主席团 (壇上に議長団が座っている)
- (5) 楼上住着客人 (上の階にお客が泊まっている)
- (6) 床上躺着一个孩子 (ベッドに子供が一人横たわっている)
- (7) 对面来了一个人 (向かい側に人がひとり来た)
- (8) 商店里到了一批货 (店に品物が一口届いた)
- (9) 屋里飞进来一只蜜蜂 (部屋に蜜蜂が一匹飛び込んで来た)
- (10) 石头缝里长出来一棵草 (石の割れ目に草が一本生えて出た)

- (11) 村子里死了一个人 (村で人が一人死んだ)
 (12) 他们家跑了一只猫 (彼らの家で猫が一匹逃げた)

上の (1) - (12) の例は大きく分けると二つに分けることができる。すなわち、朱德熙 (1982:114) は (1) - (6) を A グループ、(7) - (12) を B グループに分けている。両者の違いはどのような点にあるのだろうか。以下、朱德熙 (1982:115) の記述を引用しながら、A グループと B グループの特徴について詳しく見ていこう。

「这两类句式的主语都是处所词或处所词组，宾语都是无定的。这是共同的。区别在于：(1) 从意念上说，A 组表示存在，B 组表示出现或消失。(2) A 组的动词都是表示状态的。其中有的动词本身就表示状态（坐着、住着、躺着）；有的动词表示动作，不过动作结束以后遗留下来一种状态（写着、贴着、挂着）。B 组动词都是表示出现或消失的。(3) A 组动词带后缀“着”。B 组动词带后缀“了”或带补语。不过 A 组的宾语如果带数量词的话，动词也可以带“了”，例如：黑板上写了两个字 | 墙上贴了一幅标语 | 楼上住了一位客人」

上記の中国語を日本語へ翻訳すると次のようになる。

「A グループ B グループの文型の主語は全て場所詞あるいは場所句であり、目的語は全て不定である。この点は両者は共通している。違いは以下の三つである。一つ目は、意味の面から言うと、A グループは [存在] を表し、B グループは [出現] あるいは [消失] を表すという点である。二つ目は、A グループの動詞は全て状態を表すものであり、その内、ある動詞は、それ自体が状態を表し（“坐着”（座っている）、“住着”（泊まっている、住んでいる）、“躺着”（横たわっている））、また、ある動詞は動作を表すが、その動作の終息後に残った状態を表し（“写着”（書いてある）“贴着”（貼ってある）、“挂着”（掛かってある））、一方、B グループの動詞は [出現] あるいは [消失] を表すものである、という点である。両者の違いの三つ目は、A グループの動詞は接尾辞“着”を伴い、B グループの動詞は接尾辞“了”あるいは補語を伴うが、A グループの目的語が数量詞を持つ場合には A グループの動詞も“了”を伴うことができる、という点である。たとえば“黑板上写了两个字”（黑板に二つの字が書いてある）、“墙上贴了一幅标语”（壁に一枚の標語が貼ってある）、“楼上住了一位客人”（上の階にお客がお一人泊まっておられる）といった例がある。」

引用とそれに対する翻訳がやや長くなったので、上の記述を基に、A グループと B グループの特徴を簡潔に纏めることにしよう。以下の表 1 を見られたい。

表 1 A グループと B グループの特徴

	Aグループ	Bグループ
文全体の意味	[存在]を表す。	[出現]あるいは[消失]を表す。
動詞の意味	状態を表す。	[出現]あるいは[消失]を表す。
動詞が伴う接尾辞について	“着”を伴う。目的語が数量詞を伴う場合には“了”を伴うことができる。	“了”あるいは補語を伴う。
朱德熙(1982:114)の用例	黑板上写着字 (黑板に字が書いてある) 墙上贴着标语 (壁に標語が貼ってある) 门上挂着帘子 (ドアにすだれが掛かってある) 台上坐着主席团 (壇上に議長団が座っている) 楼上住着客人 (上の階にお客が泊っている) 床上躺着一个孩子 (ベッドに子供が一人横たわっている) 黑板上写了两个字 (黑板に二つの字が書いてある)	对面来了一个人 (向かい側から人がひとり来た) 商店里到了一批货 (店に品物が一口届いた) 屋里飞进来一只蜜蜂 (部屋に蜜蜂が一匹飛び込んで来た) 石头缝里长出来一棵草 (石の割れ目に草が一本生えて出た) 村子里死了一个人 (村で人が一人死んだ) 他们家跑了一只猫 (彼らの家で猫が一匹逃げた)

墙上贴了一幅标语 (壁に一枚の標語が貼ってある) 楼上住了一位客人 (上の階にお客がお一人泊まっておられる)	
---	--

すなわち、Aグループは文全体としては、[存在]を表しており、文中における動詞は状態を表し、かつ、動詞は接尾辞“着”を伴う。そして、目的語が数量詞を伴う場合には接尾辞“了”を伴うことができる、ということが分かる。一方、Bグループは、全体としては[出現]あるいは[消失]を表し、動詞は[出現]あるいは[消失]を表す。そして、接尾辞“了”あるいは補語を伴うことができる、ということが分かる。

以上を踏まえて、以下の第二章では、まずAグループについて論じ、その後の第三章では、Bグループについて論じる。いずれのグループの例文に対しても論理式による解析を行う。これによって、両者の違いが明白となり、朱德熙 (1982:114-115) が挙げた用例や存現目的語に対する見解が如何に的確であるかを理解することができる。

2. Aグループについて

2.1 “黑板上写着字”の論理式

“黑板上写着字”は論理式でどのように表記できるだろうか。統語的に考えると、この文における主語は自明の如く“黑板上”だが、表現論的な角度から見ると、この“黑板上”は話題 (topic) の役割を果たしていると言えるので、この“黑板上写着字”という文は“黑板上”という話題を有していることが分かる²⁾。従って、これを論理式に表すと次のようになる。

(13) 有' (黑板上,)

“有”の右横にはプライム (') があるが、これは、この式において“有”が述語の役割を果たしていることを意味している。つまり、論理上“有”は関数 (function) の役割を担っているのである³⁾。なお、この式の中にはカンマ (,) があるが、これは、話題は必ず評価表現 (comment) を有す必要がある、と考えられるからである。なお、この評価表現とは、統語的には述語に当たるものである。さて、既述の通り“黑板上写着字”における評価表現は“写着字”なので、これを (13) の式に追加させると、

(14) 有' (黑板上, 写着字)

となる。これで「黑板という話題には、字が書いてあるという評価表現を持つ」という意味を表す式が完成する。要するに、(14) は、“黑板上”と“写着字”は“有”の関係にある、ということを示している、と考えるのである。このような式で解析することにより、中国語の文に含まれる意味関係を厳密に理解することができる。つまり、字面だけでは見えてこない意味をこの論理式を通じて明示させることができるのである。

そして、この (14) の式は更に詳しい表記が可能である。つまり、評価表現の“写着字”の部分を詳細に記述することができる。それ故、以下、評価表現の部分だけに注目しよう。まず、動詞“写”は「書く」という意味だが、論理的に言うと、厳密に「～が～を書く」という意味を表すと理解できる。つまり、“写”は動作者と受動者の二つの項 (argument) を取ることができると考えられるので、次のような式となる。

(15) 写' (, 字)

この式の読みは「～が字を書く」となる。そして、“写”の動作者は (15) の文においては不明瞭なので、“ ϕ ”を用いて表記することにし (以下同様)、

(16) 写' (ϕ , 字)

と表示することにする。この (16) の式は「誰かが字を書く」と読むことができる。次に“黑板上写着字”の文において“字”は黑板に存在しているため、

(17) 写' (ϕ , 字) & 存在' (字, 黑板上)

といった式になる。“存在' (字, 黑板上)”の部分は「字が黑板に存在する」と読める。“&”は連言 (conjunction) の意味を表しているので、(17) 全体としては「誰かが字を書き、かつ、それ (字) が黑板に存在する」といっ

た読みになる。ここで注目すべきは、(17)の式は“写'(φ,字)”の部分の“字”と“存在'(字,黑板上)”の部分の“字”が連鎖的に繋がるように置かれ、演繹的な概念に基づいた表記を行っている、ということである。上で(17)の式を読む時に「それ」という読み方をしたのは、正にこのような演繹的な連鎖を表現したかったからである。

さて、あともう少しで式が全て完成となる。“黑板上写着字”には“着”が生起しているのです、これも式に表す必要がある。つまり、上の(17)の式に“着”の意味を加えて以下の(18)の式が成立する。

(18) 写'(φ,字) & 存在'(字,黑板上) & 有'(存在'(字,黑板上),着)

この(18)の中の“有'(存在'(字,黑板上),着)”の部分の読みは「字が黑板に存在するが、[持続]という様態を持つ」となり、(18)全体を読むと「誰かが字を書き、かつ、それ(字)が黑板に存在し、かつ、それ(字が黑板に存在する)が[持続]という様態を持つ」となる。

そして、この(18)の式に対して、話題の役割を担っている“黑板上”を加えると、以下の(19)のように“黑板上写着字”の全体の式がついに完成する。つまり、(13)の式である“有'(黑板上,)”に上の(18)の式を埋め込むのである。あるいは、以下の(19)の式は、(14)の式である“有'(黑板上,写着字)”を厳密に論理表記したと言ってもよい。

(19) 有'(黑板上,写'(φ,字) & 存在'(字,黑板上) & 有'(存在'(字,黑板上),着))

この(19)の式の全体的な読みは次のようになる。つまり、「黑板という話題(topic)が、誰かが字を書き、かつ、それ(字)が黑板に存在し、かつ、それ(字が黑板に存在する)が[持続]という様態を持つ、という評価表現(comment)を持つ」となる。ただ、(19)の式は丸括弧「()」が多く使われており、この式に内在する作用域(scope)が見にくいので、異なる括弧を使うようにする(以下同様)。そこで、本稿では「()」、「{ }」、「[]」、「【 】」の四つの括弧を用いることにし、「()」よりも「{ }」の方が作用域が広く、「{ }」よりも「[]」の方が作用域が広く、「[]」よりも「【 】」の方が作用域が広い、ということにする。従って、(19)の式は以下のように書き換えることができる。

(20) 有' [黑板上, 写'(φ,字) & 存在'(字,黑板上) & 有' {存在'(字,黑板上), 着}]

更に、カタカナと漢字を用いて添え字とし、式を更に読みやすくさせると次のようになる。

(21) 書ク ~ガ ~ヲ 存在スル ~ガ ~ニ 持ツ ~ガ ~ヲ
有' [黑板上, 写'(φ,字) & 在'(字,黑板上) & 有' {在'(字,黑板上), 着}]
持ツ ~ガ ~ヲ

これで“黑板上写着字”の論理式が全て完成した。やや複雑なので、(21)に含まれている式を分けて読みながら、添え字と式の対応を確認しておこう。つまり、(21)の式を読む作業を順番に行うのである。まず、(21)の式の中にある“写'(φ,字)”の部分の式は、

(22) 書ク ~ガ ~ヲ
写'(φ,字)

といった添え字を加え、この(22)の式は「誰かが字を書く」と読むことができる。次に、(21)の中の“存在'(字,黑板上)”の式は次のような添え字が加わる。

(23) 存在スル ~ガ ~ニ
存在'(字,黑板上)

この式は「字が黑板に存在する」と読める。更に(21)の式における“有' {存在'(字,黑板上), 着}”の部分にも添え字を置くと、

(24) 持ツ ~ガ ~ヲ
有' {存在'(字,黑板上), 着}

となり、この(24)の式は「字が黑板に存在するが、[持続]という様態を持つ」といった読みになる。そして最後に、(21)の式を全体的に捉えて簡単に読んだ場合、以下のような添え字が付く。

(25) 有' [黑板上, 写' (φ, 字) & 在' (字, 黑板上) & 有' {存在' (字, 黑板上), 着}]
 持ツ ~ガ ~ヲ

(22) - (24) の添え字は式の上に付いているが、この (25) の添え字は式の下に付いている。それは単純に式を読みやすくしたからである。即ち、(22) から (24) を見ると分かるように、これらの式で既に上に添え字が置かれているので、(25) では、読みやすくするために、式の下に添え字を置いたのである。

では、いま一度 (21) の論理式 (“有' [黑板上, 写' (φ, 字) & 存在' (字, 黑板上) & 有' {存在' (字, 黑板上), 着}]) の全体を丁寧に読んで確認しておこう。つまり、“黑板上写着字”を表した (21) の式は、「黑板という話題 (topic) が、誰かが字を書き、かつ、それ (字) が黑板に存在し、かつ、それ (字が黑板に存在する) が [持続] という様態を持つ、という評価表現 (comment) を持つ」と読むことができる。簡潔に読んだ場合には、「黑板という話題が、誰かが字を書いてそれが黑板に存在している、という評価表現を持つ」となる。

以上に倣って、以下、その他の例も論理表記を行うことにしたい。従って、論理式による解析がしばらく続き、一見、単調な論述であるように思われがちだが、各文に含まれる意味や、文中の各成分の間に生じる意味関係は各用例によって異なるため、やはり、一つずつ慎重に論理表記を行い、その後、丁寧に読みを与えるプロセスが欠かせない。

では、次は“墙上贴着标语”の論理式について考えてみよう。

2.2 “墙上贴着标语”の論理式

“墙上贴着标语”を論理式で表記すると次のようになる。

(26) 貼ル ~ガ ~ヲ 存在スル ~ガ ~ニ 持ツ ~ガ ~ヲ
 有' [墙上, 贴' (φ, 标语) & 存在' (标语, 墙上) & 有' {存在' (标语, 墙上), 着}]
 持ツ ~ガ ~ヲ

(26) の論理式は「壁という話題が、誰かが標語を貼り、かつ、それ (標語) が壁に存在し、かつ、それ (標語が壁に存在する) が [持続] という様態を持つ、という評価表現を持つ」という読みとなる。簡潔に読んだ場合は「壁という話題が、誰かが標語を貼りそれが壁に存在している、という評価表現を持つ」となる。式はやや複雑なので、この式に含まれている式の一つずつ読んで確認していこう。説明の便宜を図ると、この (26) の式は4つの式に分けることができる。それは、

① “有' [墙上, ……]”

② “贴' (φ, 标语)”

③ “存在' (标语, 墙上)”

④ “有' {存在' (标语, 墙上), 着}”

である。まず①の“有' [墙上, ……]”は「壁という話題が、~という評価表現を持つ」と読むことができる。“……”は省略の意味で用いた。要するに、実際には、(26) を見ると分かるように、“贴' (φ, 标语) & 存在' (标语, 墙上) & 有' {存在' (标语, 墙上), 着}”という式が入るが、一つの式に集中するため、一度、省略した形で確認を行ったのである (以下同様)。次に、②の“贴' (φ, 标语)”の部分の式は「誰かが標語を貼る」という読みになる。そして、③の“存在' (标语, 墙上)”の部分の式は「標語が壁に存在する」という読みになり、更に、④の“有' {存在' (标语, 墙上), 着}”の部分は「標語が壁に存在するが、[持続] という様態を持つ」といった読みになる。

2.3 “门上挂着帘子”の論理式

“门上挂着帘子”の論理式は以下のように書ける。

(27) 掛ケル ~ガ ~ヲ 存在スル ~ガ ~ニ 持ツ ~ガ ~ヲ
 有' [门上, 挂' (φ, 帘子) & 存在' (帘子, 门上) & 有' {存在' (帘子, 门上), 着}]
 持ツ ~ガ ~ヲ

(27) の式全体の読みとしては「ドアという話題が、誰かがすだれを掛け、かつ、それ (すだれ) がドアに存在し、かつ、それ (すだれがドアに存在する) が [持続] という様態を持つ、という評価表現を持つ」となる。簡潔な読みをすると、「ドアという話題が、誰かがすだれを掛けてそのすだれがドアに存在している、という評価

表現を持つ」となる。

この式も①、②、③、④の四つに分けて詳細に説明しよう。まず、①の“有’ [门上, ……]”は「ドアという話題が、～という評価表現を持つ」という読みになる。次に、②“挂’ (φ, 帘子)”の部分は「誰かがすだれを掛ける」という読みになる。そして、③の“存在’ (帘子, 门上)”の部分は「すだれがドアに存在する」という読みになり、さらに、④の“有’ {存在’ (帘子, 门上), 着}”の部分は「すだれがドアに存在するが、[持続]という様態を持つ」と読むことができる。

2.4 “台上坐着主席团”の論理式

今度は“台上坐着主席团”を論理表記してみよう。

(28) 座ル ~ガ 存在スル ~ガ ~ニ 持ツ ~ガ ~ヲ
有’ [台上, 坐’ (主席团) & 存在’ (主席团, 台上) & 有’ {存在’ (主席团, 台上), 着}
持ツ ~ガ ~ヲ

(28)の論理式は「壇上という話題が、議長団が座り、かつ、それ(議長団)が壇上に存在し、かつ、それ(議長団が壇上に存在する)が[持続]という様態を持つ、という評価表現を持つ」となる。簡潔に読んだ場合は「壇上という話題が、議長団が座り壇上に存在している、という評価表現を持つ」となる。

この式も①-④の四つに分けて順番に読んでいこう。①の“有’ [台上, ……]”は「壇上という話題が、～という評価表現を持つ」と読むことができ、②の“坐’ (主席团)”は「議長団が座る」と読むことができ、③の“存在’ (主席团, 台上)”は「議長団が壇上に存在する」と読むことができ、④の“有’ {存在’ (主席团, 台上), 着}”は「議長団が壇上に存在するが、[持続]という様態を持つ」と読むことができる。

2.5 “楼上住着客人”の論理式

“楼上住着客人”は下記のような論理式となる。

(29) 泊マル ~ガ 存在スル ~ガ ~ニ 持ツ ~ガ ~ヲ
有’ [楼上, 住’ (客人) & 存在’ (客人, 楼上) & 有’ {存在’ (客人, 楼上), 着}
持ツ ~ガ ~ヲ

(29)の式全体としては「上の階という話題が、お客が泊まり、かつ、それ(お客)が上の階に存在し、かつ、それ(お客が上の階に存在する)が[持続]という様態を持つ、という評価表現を持つ」といった読みが可能である。簡潔な読みは「上の階という話題が、お客が泊って上の階に存在している、という評価表現を持つ」となる。

ここでも式を①-④の四つに分けて確認しておこう。まず一つ目の①“有’ [楼上, ……]”は「上の階という話題が、～という評価表現を持つ」と読むことができる。二つ目の②“住’ (客人)”は「お客が泊まる」と読むことができる。三つ目の③“存在’ (客人, 楼上)”は「お客が上の階に存在する」と読むことができる。四つ目の④“有’ {存在’ (客人, 楼上), 着}”は「お客が上の階に存在するが、[持続]という様態を持つ」と読むことができる。

2.6 “床上躺着一个孩子”の論理式

今度は“床上躺着一个孩子”の論理式について考えてみよう。

(30) 横タワル ~ガ 存在スル ~ガ ~ニ 持ツ ~ガ ~ヲ
有’ [床上, 躺’ (一个孩子) & 存在’ (一个孩子, 床上) & 有’ {存在’ (一个孩子, 床上), 着}
持ツ ~ガ ~ヲ

(30)の論理式は「ベッドという話題が、一人の子供が横たわり、かつ、それ(一人の子供)がベッドに存在し、かつ、それ(一人の子供がベッドに存在する)が[持続]という様態を持つ、という評価表現を持つ」と読むことができる。簡潔に読んだ場合は「ベッドという話題が、一人の子供が横たわりベッドに存在している、という評価表現を持つ」となる。

以下、これまでと同様に四つの部分に分けて式を読んでいこう。一つ目の“有’ [床上, ……]”の部分の読みは「ベッドという話題が、～という評価表現を持つ」となり、二つ目の“躺’ (一个孩子)”の部分の読みは「一

人の子供が横たわる」となり、「存在’ (一个孩子, 床上)」の部分の読みは「一人の子供がベッドに存在する」となり、そして、「有’ {存在’ (一个孩子, 床上), 着}」の部分の読みは「一人の子供がベッドに存在するが、[持続]という様態を持つ」となる。

2.7 “黑板上写了两个字”の論理式

“黑板上写了两个字”は次のように論理表記することができる。式が二行に及び、やや複雑なので、話題と評価表現の関係を読む助けとなる意味注釈(カタカナ)は斜体で示すことにする(以下で同じような状況の場合も斜体を用いることとする)。

- (31) 書ク ~ガ ~ヲ 持ツ ~ガ ~ヲ
 有’ 【黑板上, 写’ (*φ*, 两个字) & 有’ {写’ (*φ*, 两个字), 了} &
 持ツ ~ガ
- 存在スル ~ガ ~ニ
- 有’ [有’ {写’ (*φ*, 两个字), 了}, 存在’ (两个字, 黑板上)]]
 持ツ ~ガ ~ヲ
- ~ヲ

(31)の論理式の全体の読みは以下の通りである。即ち「黑板という話題が、誰かが二つの字を書き、かつ、それ(誰かが二つの字を書く)が[完了]という様態を持ち、かつ、それ(誰かが二つの字を書き終えた)が二つの字が黑板に存在するという様態を持つ、という評価表現を持つ」となる。簡潔には「黑板という話題が、誰かが二つの字を書き終えてそれが黑板に存在する、という評価表現を持つ」と読むことができる。

では内部の式を一つずつ見ていきたい。ここでも四つに分けて読むことにする。一つ目は“有’ 【黑板上, ……】”である。これは「黑板という話題が、~という評価表現を持つ」と読める。二つ目は“写’ (*φ*, 两个字)”の部分の式で、これは「誰かが二つの字を書く」と読むことができる。三つ目は“有’ {写’ (*φ*, 两个字), 了}”の式である。この式の読みは、「誰かが二つの字を書くが、[完了]という様態を持つ」と読める。そして、四つ目は“有’ [有’ {写’ (*φ*, 两个字), 了}, 存在’ (两个字, 黑板上)]”の部分の式で、「誰かが二つの字を書き終えたが、二つの字が黑板に存在するという様態を持つ」と読むことができる。

2.8 “墙上贴了一幅标语”の論理式

“墙上贴了一幅标语”を論理式で示すと次のようになる。

- (32) 貼ル ~ガ ~ヲ 持ツ ~ガ ~ヲ
 有’ 【墙上, 贴’ (*φ*, 一幅标语) & 有’ {贴’ (*φ*, 一幅标语), 了} &
 持ツ ~ガ
- 存在スル ~ガ ~ニ
- 有’ [有’ {贴’ (*φ*, 一幅标语), 了}, 存在’ (一幅标语, 墙上)]]
 持ツ ~ガ ~ヲ
- ~ヲ

この式全体は簡潔に読むと「壁という話題が、誰かが一枚の標語を貼りそれが壁に存在する、という評価表現を持つ」となる。そして、詳しく読んだ場合は、次のように読むことができる。要するに、「壁という話題が、誰かが一枚の標語を貼り、かつ、それ(誰かが一枚の標語を貼る)が[完了]という様態を持ち、かつ、それ(誰かが一枚の標語を貼った)が一枚の標語が壁に存在するという様態を持つ、という評価表現を持つ」である。

この式も以下の四つに分けて読むことができる。一つ目の“有’ 【墙上, ……】”は「壁が、~という評価表現を持つ」と読み、二つ目の“贴’ (*φ*, 一幅标语)”は「誰かが一枚の標語を貼る」と読み、三つ目の“有’ {贴’ (*φ*, 一幅标语), 了}”は「誰かが一枚の標語を貼るが、[完了]という様態を持つ」と読み、四つ目の“有’ [有’ {贴’ (*φ*, 一幅标语), 了}, 存在’ (一幅标语, 墙上)]”は「誰かが一枚の標語を貼ったが、一枚の標語が壁に存

在するという様態を持つ」と読める。

2.9 “楼上住了一位客人”の論理式

“楼上住了一位客人”を論理式で表記すると、

(33) 泊マル ～ガ 持ツ ～ガ ～ヲ
有'【楼上,住'(一位客人)&有'住'(一位客人),了}&
持ツ ～ガ

存在スル ～ガ ～ニ
有' [有'住'(一位客人),了,存在'(一位客人,楼上)]
持ツ ～ガ ～ヲ
～ヲ

となる。この式全体は「上の階という話題が、お一人のお客が泊まり、かつ、それ（お一人のお客が泊まる）が[完了]という様態を持ち、かつ、それ（お一人のお客が泊まった）がお一人のお客が上の階に存在するという様態を持つ、という評価表現を持つ」と読むのが妥当である。簡潔には「上の階という話題が、お一人のお客が泊まり上の階に存在する、という評価表現を持つ」と読める。

この式も四つに分けて読みを確認しておこう。すわなち、一つ目の“有'【楼上,……】”は「上の階という話題が、～という評価表現を持つ」と読むことができ、二つ目の“住'(一位客人)”は「お一人のお客が泊まる」と読むことができ、三つ目の“有'住'(一位客人),了”は「お一人のお客が泊まるが、[完了]という様態を持つ」と読むことができ、四つ目の“有' [有'住'(一位客人),了,存在'(一位客人,楼上)]”は「お一人のお客が泊まったが、お一人のお客が上の階に存在するという様態を持つ」と読むことができる。

さて、次章では[出現]や[消失]の意を表すBグループの例文を論理式で表記する。

3. Bグループについて

3.1 “对面来了一个人”の論理式

“对面来了一个人”は以下のような論理式が妥当である。

(34) 来ル ～ガ 持ツ ～ガ ～ヲ
有'【对面,来'(一个人)&有'来'(一个人),了}&
持ツ ～ガ

出現スル ～ガ ～ニ
有' [有'来'(一个人),了,出現'(一个人,对面)]
持ツ ～ガ ～ヲ
～ヲ

(34)の論理式の全体の読みは「向かい側という話題が、一人の人が来て、かつ、それ（一人の人が来る）が[完了]という様態を持ち、かつ、それ（一人の人が来た）が一人の人が向かい側に出現するという様態を持つ、という評価表現を持つ」となる。簡潔に読むと、「向かい側が、一人の人が来て向かい側に出現する、という評価表現を持つ」となる。

次に、この式を四つに分けて丁寧に読んでみよう。“有'【对面,……】”は「向かい側という話題が、～という評価表現を持つ」と読み、“来'(一个人)”の部分は「一人の人が来る」と読み、“有'来'(一个人),了”の部分は「一人の人が来るが、[完了]という様態を持つ」と読み、“有' [有'来'(一个人),了,出現'(一个人,对面)]”は「一人の人が来たが、一人の人が向かい側に出現するという様態を持つ」と読むことができる。

3.2 “商店里到了一批货”の論理式

“商店里到了一批货”の論理式は、

(35) 届ク ~ガ 持ツ ~ガ ~ヲ
 有'【商店里, 到' (一批货) & 有' {到' (一批货), 了 | &
 持ツ ~ガ

出現スル ~ガ ~ニ
 有' [有' {到' (一批货), 了 |, 出現' (一批货, 商店里)]]
 持ツ ~ガ ~ヲ
 ~ヲ

となる。この (35) の論理式全体は「店にという話題が、一口の品物が届き、かつ、それ (一口の品物が届く) が [完了] という様態を持ち、かつ、それ (一口の品物が届いた) が一口の品物が店に出現するという様態を持つ、という評価表現を持つ」と読むことができる。簡潔に読んだ場合は次のようになる。つまり「店にという話題が、一口の品物が届いて店に出現する、という評価表現を持つ」である。

では、この式に含まれる命題を取り出してみよう。ここでも全部で四つに分ける。即ち、“有'【商店里, ……】”は「お店にという話題が、~という評価表現を持つ」と読み、“到' (一批货)”は「一口の品物が届く」と読み、“有' {到' (一批货), 了 |”は「一口の品物が店に届くが、[完了] という様態を持つ」と読み、“有' [有' {到' (一批货), 了 |, 出現' (一批货, 商店里)]”の部分は「一口の品物が店に届いたが、一口の品物が店に出現するという様態を持つ」と読める。

3.3 “屋里飞进来一只蜜蜂”の論理式

以下は“屋里飞进来一只蜜蜂”を論理式で表記したものである。

(36) 飛ビ込ンデ来ル ~ガ 出現スル ~ガ ~ニ
 有' [屋里, 飞进来' (一只蜜蜂) & 有' {飞进来' (一只蜜蜂), 出現' (一只蜜蜂, 屋里)]]
 持ツ ~ガ ~ヲ
 持ツ ~ガ ~ヲ

(36) の論理式は「部屋にという話題が、一匹の蜜蜂が飛び込んで来て、かつ、それ (一匹の蜜蜂が飛び込んで来る) が一匹の蜜蜂が部屋に出現するという様態を持つ、という評価表現を持つ」となる。簡潔に読むと「部屋にという話題が、一匹の蜜蜂が飛び込んで来て部屋に出現する、という評価表現を持つ」となる。

この式では以下のように三つの式に分けて読むことができる。つまり、“有' [屋里, ……]”の部分は「部屋にという話題が、~という評価表現を持つ」と読み、“飞进来' (一只蜜蜂)”の部分は「一匹の蜜蜂が飛び込んで来る」と読み、“有' {飞进来' (一只蜜蜂), 出現' (一只蜜蜂, 屋里) |”の部分は「一匹の蜜蜂が飛び込んで来るが、一匹の蜜蜂が部屋に出現するという様態を持つ」と読むことができる。

3.4 “石头缝里长出来一棵草”の論理式

“石头缝里长出来一棵草”は次のような論理式にするのが望ましい。

(37) 生エ出テ来ル ~ガ 出現スル ~ガ ~ニ
 有' [石头缝里, 长出来' (一棵草) & 有' {长出来' (一棵草), 出現' (一棵草, 石头缝里)]]
 持ツ ~ガ ~ヲ
 持ツ ~ガ ~ヲ

(37) の論理式は次のように読むのが妥当である。すなわち、「石の割れ目にという話題が、一本の草が生え出て来て、かつ、それ (一本の草が生え出て来る) が一本の草が石の割れ目に出現するという様態を持つ、という評価表現を持つ」である。簡潔に読んだ場合は「石の割れ目にという話題が、一本の草が生え出て来て石の割れ目に出現する、という評価表現を持つ」となる。

この論理式は次のように三つに分けて読むことが可能である。要するに、“有' [石头缝里, ……]”は「石の割れ目にという話題が、~という評価表現を持つ」と読み、“长出来' (一棵草)”は「一本の草が生え出てくる」と読み、“有' {长出来' (一棵草), 出現' (一棵草, 石头缝里) |”は「一本の草が生え出て来るが、一本の草が

石の割れ目に出現するという様態を持つ」と読める。

3.5 “村子里死了一个人”の論理式

“村子里死了一个人”を論理式で表現した場合は次のようになる。

(38) 死ヌ ～ガ 持ツ ～ガ ～ヲ
有’【村子里,死’ (一个人) & 有’ {死’ (一个人),了|&
持ツ ～ガ

存在シナイ ～ガ ～ニ

有’ [有’ {死’ (一个人),了|,¬存在’ (一个人,村子里)]]
持ツ ～ガ ～ヲ
～ヲ

上記の式は全体的に「村にという話題が、一人の人が死に、かつ、それ（一人の人が死ぬ）が[完了]という様態を持ち、かつ、それ（一人の人が死んだ）が一人の人が村に存在しないという様態を持つ、という評価表現を持つ」と読むのが望ましい。簡潔には「村にという話題が、一人の人が死んで村に存在しない、という評価表現を持つ」と読むことが可能である。

この式は更に以下のように四つに分けて丁寧に読むことができる。まず、“有’【村子里,……】”の部分は「村にという話題が、～という評価表現を持つ」と読み、次に、“死’ (一个人)”の部分は「一人の人が死ぬ」と読み、そして、“有’ {死’ (一个人),了|”の部分は「一人の人が死ぬが、[完了]という様態を持つ」と読み、更に、“有’ [有’ {死’ (一个人),了|,¬存在’ (一个人,村子里)]”は「一人の人が死んだが、一人の人が村に存在しないという様態を持つ」と読める。ここでの“¬”は否定 (negation) の意味を表す論理結合子として用いているので、“¬存在’”は「存在しない」の意として解釈する。

特筆すべき点は上述の“¬存在’ (一个人,村子里)”の部分の式である。つまり、この“村子里死了一个人”は、[消失]の意味を表すが、これは論理式において[¬存在]と解釈しているのである。[出現]の意は[¬存在]と解釈した方がより厳密な表記であると言える。実は、この点に注目することで、本稿で取り扱っている存現目的語（“存現宾语”）の命名の由来が明白となる。要するに、朱德熙 (1982:114-115) は、[存在]、[出現]、[消失]の総称して“存現”とし、この中の[消失]は[¬存在]と解釈していたと推測できるのである⁴⁾。従って、本稿の論理式による解析によって、朱德熙 (1982:114-115) の見解が極めて周到であることを確認することができる。

さて、以下の3.6でもう一つ[消失]、要するに[¬存在]の意味を表す文（“他们家跑了一只猫”）を論理解析しよう。

3.6 “他们家跑了一只猫”の論理式

(39) 逃ゲル ～ガ 持ツ ～ガ ～ヲ
有’【他们家,跑’ (一只猫) & 有’ {跑’ (一只猫),了|&
持ツ ～ガ

存在シナイ ～ガ ～ニ

有’ [有’ {跑’ (一只猫),了|,¬存在’ (一只猫,他们家)]]
持ツ ～ガ ～ヲ
～ヲ

(39)の論理式の全体の読みは「彼らの家という話題が、一匹の猫が逃げ、かつ、それ（一匹の猫が逃げる）が[完了]という様態を持ち、かつ、それ（一匹の猫が逃げた）が一匹の猫が彼らの家に存在しないという様態を持つ、という評価表現を持つ」となる。簡潔な読みとしては「彼らの家という話題が、一匹の猫が逃げて彼らの家に存在しない、という評価表現を持つ」となる。

では、この式の中に内在されている小さな式を取り出して読んでみたい。全部で四つ取り出す。つまり、“有’【他们家,……】”の部分の式は「彼らの家という話題が、～という評価表現を持つ」と読み、“跑’ (一只猫)”の部分の式は「一匹の猫が逃げる」と読み、“有’ {跑’ (一只猫), 了’}”の部分の式は「一匹の猫が逃げるが、[完了]という様態を持つ」と読み、“有’ [有’ {跑’ (一只猫), 了’, -存在’ (一只猫, 他们家)]”の部分の式は「一匹の猫が逃げたが、一匹の猫が彼らの家に存在しないという様態を持つ」と読むことができる。

以上、AグループとBグループについて論じてきたが、朱德熙 (1982:115) では、Aグループについて更に詳述しているので、次章ではこの点について言及し、その後、用例を論理式で表記することにしたい。

4. Aグループに対する詳述

4.1 変換できるAグループについて

まず、朱德熙 (1982:115) の記述を引用する。

「A組句式跟“屋里开着会”“外头下着雨”“身上发着烧”一类句子形式上相同，实际上不一样。A组句式的主语和宾语可以互换位置，使原来的存现宾语转为主语，原来的处所主语转为处所宾语。这样换位的时候，动词后缀“着”也得相应地转换成“在”或是它的弱化形式·de」

(Aグループの文型は“屋里开着会”(部屋では会議をしている)、“外头下着雨”(外は雨が降っている)、“身上发着烧”(体に熱が出ている)といったタイプの文と形式上同じように見えるが、実際は異なる。Aグループの文型の主語と目的語は、互いに位置を交換することができ、もとの存現目的語を主語に転じさせ、もとの場所主語を場所目的語に転じさせることができる。このように位置を交換した時、動詞接尾辞の“着”はそれに相応させるようにして“在”、あるいは、その弱化形式の“·de”に変換しなければならない)

次に、朱德熙 (1982:115) が挙げた例を見られたい。なお、例文における矢印の記号は筆者が加えたが、これは変換が可能であることを意味している。

- (40) 黑板上写着字 (黑板に字が書いてある) → 字写在 (·de) 黑板上 (字は黑板に書いてある)
- (41) 墙上贴着标语 (壁に標語が貼ってある) → 标语贴在 (·de) 墙上 (標語は壁に貼ってある)
- (42) 池子里养着鱼 (池に魚が飼ってある) → 鱼养在 (·de) 池子里 (魚は池に飼ってある)
- (43) 楼上住着客人 (上の階にお客が泊まっている) → 客人住在 (·de) 楼上 (お客は上の階に泊まっている)
- (44) 床上躺着一个孩子 (ベッドに子供が一人横たわっている) → 孩子躺在 (·de) 床上 (子供はベッドに横たわっている)

このようにAグループに属する文が上の(40) - (44)のように変換できるのは重要である。なぜなら、このような変換が可能であるからこそ、Aグループの文は[存在]の意味を含んでいると理解することができるからである。では、これらの変換後の例に対しても論理表記を行うことにしたい。上で述べたように、変換後は動詞の後に“在”または“de”が生起するが、本稿では統一して“在”を用いて解析することにする。

4.1.2 論理式による解析

4.1.2.1 “字写在黑板上”の論理式

“字写在黑板上”の論理式は以下のように考えられる。

- (45) 書ク ~ガ ~ヲ 存在スル ~ガ ~ニ
有’ {字, 写’ (φ, 字) & 在’ (字, 黑板上)}
持ッ ~ガ ~ヲ

この式全体は下記のような読みが適切である。つまり、「字という話題が、誰かが字を書き、かつ、それ(字)が黑板に存在する、という評価表現を持つ」である。簡潔に読むと「字という話題が、誰かが字を書いてそれが黑板に存在する、という評価表現を持つ」となる。

この式には三つの式が含まれているので、それらを取り出して読んでおこう。即ち、“有’ {字,……}”の部分は「字という話題が、～という評価表現を持つ」と読み、“写’ (φ, 字)”の部分は「誰かが字を書く」と読み、“在’ (字, 黑板上)”の部分は「字が黑板に存在する」と読める。

4.1.2.2 “标语贴在墙上”の論理式

“标语贴在墙上”を論理式で示すと、

- (46) 貼ル ~ガ ~ヲ 存在スル ~ガ ~ニ
有' {标语, 贴' (φ, 标语) & 在' (标语, 墙上) }
持ツ ~ガ ~ヲ

と書くことができる。この式の全体である“有' {标语, 贴' (φ, 标语) & 在' (标语, 墙上) }”を読むと「標語という話題が、誰かが標語を貼り、かつ、それ(標語)が壁に存在する、という評価表現を持つ」となる。簡潔な読みとしては「標語という話題が、誰かが標語を貼りそれが壁に存在する、という評価表現を持つ」となる。

さて、上記の式の内部を取り出した場合、以下の三つの式が挙げられる。その一つ目は、“有' {标语, ……}”であり、これは「標語という話題が、~という評価表現を持つ」と読むことができる。二つ目は、“貼' (φ, 标语)”であり、これは「誰かが標語を貼る」と読むことができる。三つ目の式としては、“在' (标语, 墙上)”で、これは「標語が壁に存在する」と読むことができる。

4.1.2.3 “鱼养在池子里”の論理式

“鱼养在池子里”の論理表記は、

- (47) 飼ウ ~ガ ~ヲ 存在スル ~ガ ~ニ
有' {鱼, 养' (φ, 鱼) & 在' (鱼, 池子里) }
持ツ ~ガ ~ヲ

と書ける。この式の中の“有' {鱼, ……}”の部分は「魚という話題が、~という評価表現を持つ」と読み、“养' (φ, 鱼)”の部分は「誰かが魚を飼う」と読み、“在' (鱼, 池子里)”の部分は「魚が池に存在する」と読めるので、(47)全体の“有' {鱼, 养' (φ, 鱼) & 在' (鱼, 池子里) }”としては「魚という話題が、誰かが魚を飼い、かつ、それ(魚)が池に存在する、という評価表現を持つ」と読むことができる。簡潔に読んだ場合は、「魚という話題が、誰かが魚を飼いそれが池に存在する、という評価表現を持つ」となる。

4.1.2.4 “客人住在楼上”の論理式

“客人住在楼上”を論理式で表現すると以下の(48)の式となる。

- (48) 泊マル ~ガ 存在スル ~ガ ~ニ
有' {客人, 住' (客人) & 在' (客人, 楼上) }
持ツ ~ガ ~ヲ

この式の中の“有' {客人, ……}”は「お客という話題が、~という評価表現を持つ」と読み、“住' (客人)”は「お客が泊まる」と読み、“在' (客人, 楼上)”は「お客が上の階に存在する」と読むことができる。従って、(48)の式全体の“有' {客人, 住' (客人) & 在' (客人, 楼上) }”は「お客という話題が、お客が泊まり、かつ、それ(お客)が上の階に存在する、という評価表現を持つ」という読みとなる。簡潔には「お客という話題が、お客が泊まり上の階に存在する、という評価表現を持つ」と読める。

4.1.2.5 “孩子躺在床上”の論理式

“孩子躺在床上”に対して論理表記を施すと次のような式になる。

- (49) 横タワル ~ガ 存在スル ~ガ ~ニ
有' {孩子, 躺' (孩子) & 在' (孩子, 床上) }
持ツ ~ガ ~ヲ

この式は以下の三つ分けて細かく読むことが可能である。即ち、“有' {孩子, ……}”の部分の式は「子供という話題が、~という評価表現を持つ」と読み、“躺' (孩子)”の部分の式は「子供が横たわる」と読み、“在' (孩子, 床上)”の部分の式は「子供がベッドに存在する」と読める。従って、式全体の“有' {孩子, 躺' (孩子) & 在' (孩子, 床上) }”は「子供という話題が、子供が横たわり、かつ、それ(子供)がベッドに存在する、という評価表現を持つ」といった読みとなる。簡潔には「子供という話題が、子供が横たわりベッドに存在する、という評価

表現を持つ」と言える。

さて、次節では A グループについてもう少し論じることにはしたい。

4.2 変換できない A グループについて

以下の (50) - (55) は朱德熙 (1982:115) が挙げた例である (* は非文であることを意味している)。

(50) 屋里开着会 (部屋は会議が開かれている)

* (51) 会开在屋里 (会議は部屋で開かれている)

(52) 外头下着雨 (外は雨が降っている)

* (53) 雨下在外头 (雨は外に降っている)

(54) 身上发着烧 (体は熱が出ている)

* (55) 烧发在身上 (熱は体に出ている)

上の例に対する朱德熙 (1982:115) の見解は以下の通りである。

「“屋里开着会”“外头下着雨”“身上发着烧”不能转换为“* 会开在屋里”“* 雨下在外头”“* 烧发在身上”，因为这类句子里的宾语不是存现宾语。从意念上说，A 组句式表示事物的位置，“屋里开着会”“外头下着雨”等等表示动作的持续（会正在开，雨正在下）。这两类句式表面上看起来一样，实际上结构不同。

（“屋里开着会”（部屋は会議が開かれている）、“外头下着雨”（外は雨が降っている）、“身上发着烧”（体は熱が出ている）は、それぞれ“* 会开在屋里”、“* 雨下在外头”、“* 烧发在身上”に変換することができない。なぜなら、この類の文の目的語は存現目的語ではないからである。意味の面から言うと、A グループの文型は事物の位置を表し、“屋里开着会”、“外头下着雨”などは動作の[持続]を表している（例えば“会正在开”（会議はちょうど行われているところだ），“雨正在下”（雨はちょうど降っているところだ））。これら二つのタイプの文型は、表面上は同じに見えるが、実際には構造が異なっている。）

朱德熙 (1982:115) は、正に既述のような変換の可否によって、“屋里开着会”、“外头下着雨”、“身上发着烧”等の文は存現文ではないことを証明している、ということが分かるが、これを論理式によって明記することで、両者の違いをより明白にさせることができる。以下、論理式による解析を見られたい。

4.2.1 論理式による解析

4.2.1.1 “屋里开着会”の論理式

“屋里开着会”は次のような論理式が妥当であると思われる。

(56) 開ク ~ガ ~ヲ 持ツ ~ガ ~ヲ 持ツ ~ガ ~ヲ
 有'【屋里, 开' (φ, 会) & 有' {开' (φ, 会), 屋里} & 有' [有' {开' (φ, 会), 屋里}, 着']
 持ツ ~ガ ~ヲ

この式はやや長いですが全て読むと「部屋という話題が、誰かが会議を開き、かつ、それ（誰かが会議を開く）が部屋という場所を持ち、かつ、それ（誰かが会議を開くが部屋という場所を持つ）が[持続]という様態を持つ、という評価表現を持つ」と読める。簡潔に読むと「部屋という話題が、誰かが部屋で会議を開いている、という評価表現を持つ」となる。

以下、全体の式から部分的な式として四つを取り出し、それらに対して読みを行う。一つ目は“有'【屋里, ……】”であり、「部屋という話題が、~という評価表現を持つ」と読むことができる。二つ目は“开' (φ, 会)”だが、これは「誰かが会議を開く」と読むことができる。そして三つ目は“有' {开' (φ, 会), 屋里}”であり、「誰かが会議を開くが、部屋という場所を持つ」と読むことができる。最後の四つ目は“有' [有' {开' (φ, 会), 屋里}, 着]”であり、この式の読みは「誰かが会議を開くが部屋という場所を持つが、[持続]という様態を持つ」となる。

重要なことは、この論理式では事物がある場所に存在していること、つまり[存在]の意味が読み取れない、ということである。つまり「誰かが部屋で会議を開く」という出来事そのものが“着”によって[持続]しているのである。このように考えると、朱德熙 (1982:115) が「A グループの文型は事物の位置を表し、“屋里开着会”、“外头下着雨”などは動作の持続を表す」、「これら二つのタイプの文型は、表面上は同じに見えるが、

実際には構造は異なっている」といった見解に到った所以を容易に理解することができる。この違いは上で見たように正に論理式において明白となるのである。

4.2.1.2 “会开在屋里”の論理式

今度は“会开在屋里”を論理式で解析してみよう。この文は上の朱徳熙(1982:115)の指摘の通り非文となるが、それは論理式においても見事に反映させることができる。

- (57) 開ク ~ガ ~ヲ 存在スル ~ガ ~ニ
有' {会, 开' (φ, 会) & 在' (会, 屋里) }
持ツ ~ガ ~ヲ

ここでの式は、部分的に見ていくと、“有' {会, ……}”は「会議という話題が、~という評価表現を持つ」と読むことができ、“开' (φ, 会)”は「誰かが会議を開く」と読むことができる。そして、“在' (会, 屋里)”は「会議が部屋に存在する」と読むことができるが、会議自体が個体として部屋に存在するということは、論理上、適切な解釈ではないが故、“会开在屋里”の文が非文であると見なしえる。つまり、“在' (会, 屋里)”の部分の式が“会开在屋里”が非文であることを表現していると考えられるのである。

4.2.1.3 “外头下着雨”の論理式

“外头下着雨”は次のような論理式が適切であると考えられる。

- (58) 降ル ~ガ 持ツ ~ガ ~ヲ 持ツ ~ガ ~ヲ
有' 【外头, 下' (雨) & 有' {下' (雨), 外头} & 有' [有' {下' (雨), 外头}, 着]]
持ツ ~ガ ~ヲ

この式は「外という話題が、雨が降り、かつ、それ(雨が降る)が外という場所を持ち、かつ、それ(雨が降るが外という場所を持つ)が[持続]という様態を持つ、という評価表現を持つ」と読むことができる。これは(58)の式全体を読んだものである。簡潔な読みを行った場合は「外という話題が、雨が外で降っている、という評価表現を持つ」となる。

この式に内在する式としては以下の四つが注目に値する。まず、“有' 【外头, ……】”の部分は「外という話題が、~という評価表現を持つ」と読むことができる。次に、“下' (雨)”の部分は「雨が降る」と読むことができる。そして、“有' {下' (雨), 外头}”の部分は「雨が降るが、外という場所を持つ」と読むことができる。最後に“有' [有' {下' (雨), 外头}, 着]”の部分は「雨が降るが外という場所を持つが、[持続]という様態を持つ」と読むことができる。従って、“外头下着雨”は、上述の“屋里开着会”と同様に、出来事自体が“着”によって[持続]しているということが理解でき、[存在]の意味は表現されていないと見なしえる。

4.2.1.4 “雨下在外头”の論理式

ここでは、朱徳熙(1982:115)の記述の如く、成立不可と見なされる“雨下在外头”の論理式について考えてみよう。以下の(59)を見られたい。

- (59) 降ル ~ガ 存在スル ~ガ ~ニ
有' {雨, 下' (雨) & 在' (雨, 外头) }
持ツ ~ガ ~ヲ

以下、この式の中に含まれている式を一つずつ取り出して読んでいこう。全部で三つある。まず、“有' {雨, ……}”の部分は「雨という話題が、~という評価表現を持つ」と読める。次に、“下' (雨)”の部分は「雨が降る」と読める。そして、“在' (雨, 外头)”の部分は「雨が外に存在する」と読める。注目すべきは、この“在' (雨, 外头)”の部分の式である。この式の表記から、「雨が外に存在する」という命題内容は成立し難いことが看取できる。要するに、「雨という個体だけが外に存在する」といった表現は、論理上、不適切であると判断できるのである。

4.2.1.5 “身上发着烧”の論理式

“身上发着烧”を論理表記すると次のような式が書ける。

- (60) 出ス ~ガ ~ヲ 持ツ ~ガ ~ヲ
 有' [身上, 发' (身上, 烧) & 有' {发' (身上, 烧), 着}]
 持ツ ~ガ ~ヲ

(60) の式である“有' [身上, 发' (身上, 烧) & 有' {发' (身上, 烧), 着}]”の読みは「体という話題が、体が熱を出し、かつ、それ（体が熱を出す）が[持続]という様態を持つ、という評価表現を持つ」となる。簡潔には「体という話題が、体が熱を出している、という評価表現を持つ」といった読みが妥当である。

(60) から部分的な式を三つ取り出してみよう。一つ目の“有' [身上, ……]”の部分は「体という話題が、~という評価表現を持つ」と読み、二つ目の“发' (身上, 烧)”の部分は「体が熱を出す」と読み、三つ目の“有' {发' (身上, 烧), 着}”の部分は「体が熱を出す、[持続]という様態を持つ」と読める。そのため、この“身上发着烧”も存現文ではないことが分かる。つまり、“身上发着烧”は既に論じた“屋里开着会”、“外头下着雨”と同じく、出来事自体が[持続]していることを表しているのである。

4.2.1.6 “烧发在身上”の論理式

以下の(61)は“烧发在身上”を論理式で表したものである。これは朱德熙(1982:115)が述べているように非文である。その原因は論理式から看取できる。

- (61) 出ル ~ガ ~ヲ 存在スル ~ガ ~ニ
 有' {烧, 发' (φ, 烧) & 在' (烧, 身上)}
 持ツ ~ガ ~ヲ

この式は以下の三つに分けて細かく読むことが重要である。まず“有' {烧, ……]”は「熱という話題が、~という評価表現を持つ」と読める。次に“发' (φ, 烧)”は「誰かが熱を出す」と読める。そして、“在' (烧, 身上)”は「熱が体に存在する」と読むことができるが、「熱という個体自体が体に存在する」といった命題内容は、論理的な視点から考えると、妥当な解釈ではないと理解することができる。それ故、この部分の式が非文と理解する上で鍵となっていると言える。

5. 結びにかえて

以上、朱德熙(1982:114-115)の記述と用例を基に、論理式を用いて、存現文に含まれている意味を厳密に解釈した。第一章では、存現目的語の特徴を基に、二つのタイプ(AタイプとBタイプ)に分けられることを確認した後、論理式を用いて両者の差異を明らかにし、[消失]の意味は厳密に[-存在]と解釈できることを指摘した。第二章では、Aタイプの特徴を論理式で、そして第三章においては、Bタイプの特徴を論理式で表した。最後の第四章では、Aグループの存現文に関して更に詳述した。

注釈

- 1) 本稿の中国語に対する日本語訳は全て筆者による。
- 2) 話題については青木(2017)を参照されたい。
- 3) この式では“有”が用いられているが、これは『論理哲学論考』(ウイトゲンシュタイン著、野矢茂樹訳:184)における記述を拠り所としている。野矢は論理形式について次のような注釈を与えている。
 「ある対象の論理形式とは、その対象がどのような事態のうちに現れうるか、その論理的可能性の形式のことである。たとえばある対象aが赤い色をしていたとしよう。対象aにとって赤いという色は外的性質であり、他の色をもつこともありえた。つまり、〈aは青い〉〈aは黄色い〉等の事態も可能である。このことを「対象aは色という論理形式をもつ」と言う。……」
 故に、以下の論理式において“有”を用いた場合には、以上の「論理形式」の概念に基づいて使用したとする。論理式については青木(2014)、松村(2017)を参照されたい。
- 4) この[-存在]に関する見解は恩師の松村文芳教授のご指摘をもとに考えたものである。

参考文献

青木萌 2014 「現代中国語における副詞“在”の意味と論理」、神奈川大学大学院博士論文。

青木萌 2017 「朱德熙（1982）における「話題」について」、『神奈川大学大学院言語と文化論集』（第23号）。

神奈川大学大学院外国語学研究科。

ワイトゲンシュタイン著、野矢茂樹訳 2003 『論理哲学論考』。東京：岩波文庫。

朱德熙著、杉村博文、木村英樹訳 1995 『文法講義』、東京：白帝社。

松村文芳 2017 『現代中国語の意味論序説』（神奈川大学言語学研究叢書8）、東京：ひつじ書房。

朱德熙 1982 《语法讲义》、北京：商务印书馆。